

ファルメディコ株式会社 狭間研至氏
「決断する薬剤師が今後求められる」

ファルメディコ株式会社の代表取締役社長・狭間研至氏は、11月13日の日本医療薬学会で「近未来の期待される薬剤師像—超高齢社会の地域医療の担い手として—」と題して講演を行い、「超高齢社会では、薬局の外に出て、決断力と責任を持てる薬剤師が求められる」として、薬剤師がチーム医療に積極的に参加し在宅医療の中心を担っていくべきと述べた。

狭間氏は、「医師が手術の決断を迫られるのと同様に、薬剤師も在宅医療に参加することで薬剤師としての決断力を磨くべき」と述べ、決断力を磨くための条件として、①自らの専門性を自覚する、②患者のそばに寄り添う、③死生観を養う——の3点を挙げた。「薬局の中だけでは薬剤師の職能が埋もれてしまう。他職種の中においてこそ薬剤師特有の才能が発揮され、薬剤師の決断を求められる」として、積極的に医師・看護師らと交わることで、薬剤師の専門性を自ら模索することを求めた。患者に寄り添う意義としては「薬局で処方せんを受け付けるだけでは、新聞からニュースを知るのと同じで、自分にとって必要な情報が正確かつ最新であるとは限らない」と述べ、バイタルサインを例に挙げ「薬剤師が行ったバイタルサインチェックは、自分で得たデータである点と最新のデータである点の二重の価値がある」として、在宅医療の現場にいることの重要性を訴えた。また、誰にでも死が訪れることを受け入れることで余命宣告された患者の在宅生活の充実に目を向けられるとして、多くの在宅現場を経験し死生観を養うことが肝心と述べた。

狭間氏は、医師による処方「必要な効能効果で薬を足し算」しており、薬剤師の処方「副作用を考えての引き算」であると比較し、処方を減らしたり変更したりする提案は薬剤師特有のものとして、「引き算の力と自分で得た患者のデータがあれば、在宅医療に参加しても自信を持って薬剤師の決断ができる」と話した。

■服薬コンプライアンスを看護師が担っている現状を危惧

狭間氏は、今後ますます要介護高齢者が増加する超高齢社会での課題として、高齢化に伴って増加する認知症患者の服薬コンプライアンスの重要性を指摘し、「短期記憶がなく計画が立てられない認知症患者に薬物治療を継続させるには薬剤師の参加が不可欠」と述べた。一方で、現状では患者ごとの配薬や体調・服薬のアドバイスなど薬剤師の職能を活かすべき場面を看護師が担っている例もあることから、薬剤師の積極的な介入が不足していることを危惧した。

また、在宅患者の処方を医師にフィードバックするだけの従来のサイクルを改め、薬剤師が在宅医療に参加することで得た患者データを医師に発信し、次回の患者の診察に役立ててもらおうというサイクルをつくっていくべきと提案し、「薬剤師が今していることより今できることの方が多く、今すべきことはさらに多い」と締めくくった。